CORE

インターネットを“つないで”復興支援の議論を交わす仙台大と筑波大の学生たち

# つながり

阿部 篤志
本誌編集委員・仙台大学体育学部講師

ある飲み会の席で、大学柔道部の指導者から聞いた話。

「震災の影響で、合同合宿に参加できるチームが減ってしまい困っていたところ、それを聞きつけた福岡の指導者仲間が、マイクロバスで九州から仙台まで駆けつけてくれたんですよ。もう本当に嬉しくて」

スポーツにはさまざまな価値がある。なかでも「ネットワーク」の価値は何ものにも代えがたい。スポーツは必ず人とのつながりの中にその営みをもつ。練習や合宿、大会などを通じて、まちや国境を越えて出会い、時間を、そしてその楽しさや困難さを共有し、絆が生まれる。スポーツは私たちのつながりを自然に拡げてくれる。普段はあまり意識をすることはないが、そのつながりは、あるとき私たちに大きな力を与えてくれるものとなる。

国連は2010年、ミレニアム開発目標に掲げられた世界の諸問題を解決していく手段としてのスポーツの可能性についての決議を採択した。「スポーツは世界の問題を解決はしないが、よりよい世界をつくるための架け橋になる」。かつてジャック・ロゲ国際オリンピック委員会（IOC）会長が述べた言葉は、国連が見いだしたスポーツの価値を明確に言い表している。

ある女性起業家は「お互いに知り合うこと（ネットメイキング）は簡単にできるが、自ら動いて発信して初めてそのつながりを活かすこと（ネットワーキング）ができる」と表現する。時代に即した新たなスポーツの姿が模索されているいま、自分のつながりがどのように「ワーク」しているか、一度振り返ってみてはどうだろう。私たちはきっと、社会の良き架け橋となる鍵を握っているのだから。

sj

今号特集に関する
緊急読者アンケートを
実施します!
詳しくは28ページへ!!

◆特集

# スポーツと復興支援


―― スポーツにできること …… 10

1.支援レポート …… 11

2.その後の総合型クラブ ①釜石シーウェイブス(釜石) …… 18

②アクアゆめクラブ(七ヶ浜) …… 20

③はらまちクラブ(南相馬) …… 22

④滑川ファミリースポーツクラブ(日立) …… 24

3.これからの復興支援(スポーツこころのプロジェクト　笑顔の教室、日本アスリート会議) …… 26


日本のスポーツ100周年
誇れる未来にあらたな一歩
日本体育協会は平成23(2011)年に
創立100周年を迎えます


SJ 指導者のためのスポーツジャーナル
冬号
2011 vol.290


## 目次


〈巻頭カラー〉

CORE
つながり(阿部 篤志) …… 1

あの人に会いたい
衣笠 祥雄 …… 2

NEXT STAGE
青柳 勧 …… 4

HUMAN PROJECT
NPO法人TSC …… 6

〈連載〉

スポーツ草紙
砂坂 美紀 …… 30

生涯現役
渡邉 美江子 …… 33

「おカネ」で見るスポーツ現場
「スポーツコミュニティの形成促進」事業 …… 37

Tea Break―話のネタ帖
スポーツとランキング …… 38

留学生は見た!
レイチェル・アンドリュー(オーストラリア) …… 39

TOPICS 1 国体レポート …… 40
2 第6回日本スポーツグランプリ表彰式 …… 41
3 韓国のエリート選手を育成する「学校運動部」活動 …… 42

『アクティブ・チャイルド・プログラム』活用のすすめ …… 44

〈JASAインフォメーション〉

アクティブ・チャイルド・プログラム講習会 開催 …… 47
資格更新のための義務研修会開催のお知らせ …… 48
AT-net …… 51
Dr.-net …… 51
公認スポーツ指導者登録状況 …… 52
日本馬主協会連合会より本会への助成金の贈呈 …… 54
生涯スポーツ・体力つくり全国会議2012 …… 54
2012年ロンドンオリンピック視察団 …… 56

本棚のスポーツ …… 61
住所変更用紙 …… 62

特集

# 「スポーツと復興支援」

## ――スポーツに何ができるか

東日本大震災の被災地は、直後の混乱と被害の甚大さにさいなまれながらも、ここへきて復興への意欲をさまざまに示しはじめている。この間、現地の人々を勇気づける活動がくり返し行われ、スポーツの分野からも、個人、団体、チーム、グループなどそれぞれの発想と手法で積極的な支援が見られた。同時にそれらの活動を通じて、スポーツと社会との結びつきが理解され、スポーツが発揮する力への認識が一般の人々の間に広まりつつある。震災から半年を経たいま、新たな日々へ向けてスポーツに、そしてスポーツ指導者にできることは何か、考えたい。

思います」（千葉さん）

## スポーツ指導はしなくとも

校舎のあちらこちらにヒビが入り、体育館もいまだ修理のめどが立っていないなど、被害の跡が色濃く残る仙台市立高砂中学校。汚泥に覆われた校庭は4月下旬まで使用することができなかった。運動部の部室にも津波はおよび、備品のほとんどは廃棄せざるを得なくなったという。

そんな高砂中学校へは、数多くの支援物資が届けられた。4月にはVリーグ女子のパイオニアからバレーボールなどが、元ベガルタ仙台の平瀬智行さんや奈良橋晃さんからはサッカーボールやユニフォームが手渡された。

また6月には日本スケート連盟から橋本聖子会長をはじめ、フィギュアスケートの小塚崇彦選手、スピードスケートの及川佑選手、ショートトラックの桜井美馬選手が同校を訪問。文房具などが寄贈された。

運動施設の復旧が不十分という事情からか、高砂中学への支援はスポーツ指導よりも物資の支援という形が多くみられた。それでもアスリートの訪問は子どもたちにとってプラスになった、と同校の長井真一教頭。

「一度の運動指導で劇的に技術が向上するはずもありません。技術面よりもむしろ『皆に応援してもらっている』という精神的な励みになっているように見えます」

## 大学だからできる支援

同じ仙台でも地域によって被災の状況は大きく異なる。内陸の高台にキャンパスを置く仙台大学は幸いにも大きな被害は無く、逆にいちはやく地域への支援活動に乗り出した。

もともとボランティアへの関心が高い学生が多く、年間600人程度が大学のボランティアセンターに登録。震災直後にメールで参加を募ったところ、春休み中だったにもかかわらず、即座に100人の学生、30人の教員が駆けつけた。3月末には組織を立ち上げ、4月6日には活動を開始。避難所が閉鎖される7月まで、学生・教員合わせてのべ713人が山元町、亘理町などで活動に従事した。

『大学として』の前に『人として』何かせずにはいられない、と

## 被災地に笑顔の花がひらいた！

いう思いがまずありました」と同大学学長補佐の佐藤滋氏。

仙台大では、がれき撤去などの被災地支援、活動機材の調達などの後方支援に加え、体育系大学としての特徴を活かし、避難者を対象とした運動指導も実践。特にきゅうくつな避難所暮らしを強いられていた中高年層の評判は上々で、現在もなお、仮設住宅や民間アパートに活動の場を移して継続している。

復旧活動がひと段落した今後、地域住民のスポーツへのニーズはますます高まってくるだろう。その声に応えるべく、仙台大は〝仙台大学スポーツ&ヘルスコンシェルジュ・プロジェクト〟を7月に立ち上げた。〝コンシェルジュ〟とは、ホテルやデパートなどで顧客のあらゆる要望に応える、いわば〝よろず相談室〟。同大学スポーツ情報マスメディア研究所の山内亨所長は、その狙いを次のように語る。

「大学は世界中からさまざまな情報が入ってくるところ。そしてその地域のニーズが入りやすいところでもあります。そのネットワークを活用することで、被災者と支援者との温度差を埋めるお手伝いをしていきたい」

筑波大学※BAMISセンター主催のイベント〝復興支援キャンプ〟に、ボランティア活動に従事した仙台大の学生がインターネットで参加したのは、その活動事例のひとつ。「何かできないか」という漠然としたリクエストにも最適解を考え、提供していくところに特徴がある。そのために求められるのは〝ニーズの吸い上げ〟だろう。

「被災地の方は、『自分たちで何とかしなくちゃ』という意識が高く、あらたまって聞いても本当のニーズは引き出しにくい。より地域と密着しながら、住民の声に耳を傾けていきたいと考えています」

### 草の根レベルでの多様な支援

ここで紹介した支援活動は、もちろん一例にしか過ぎない。アスリート個人やチーム、競技団体などによって、義援金や支援物資の贈呈などさまざまな支援が行われた。

また忘れてならないのは、草の根レベルで数え切れないほど支援活動が行われていたこと。たとえば先に触れた高田高校には、まったく交流が無かった大宮東高校の野球部からユニフォームやグロー

※ Body And Mind Integrated Sports Sciences（身心統合スポーツ科学）の略

## 「今度は私が応援する番」

大山 加奈さん（元女子バレーボール日本代表）

今年の1月、Vリーグ機構の職員だった私は、バレーボール教室を行うために陸前高田へ。全国いろいろなところへ指導に行く中で、特に元気で上手な小学生が多かったので、強く印象に残っていました。

ですから3月11日、たいへんな災害が起こったとき、真っ先にあの子たちの笑顔が目に浮かびました。と同時に、いても立ってもいられない気持ちが湧いてきたんです。昨年現役を引退するまで、私はたくさんの方々に応援していただきました。今度は私が皆さんを応援する番。まだまだ復興には長い時間がかかると思いますが、私にできることを少しずつ続けていきたいと考えています。

5月には、陸前高田の小学生たちと再会。はじめはやはり元気がない様子でしたが、からだを動かすうちに少しずつ笑顔を取り戻してくれました。たとえひと時でも、嫌なことを忘れて夢中になれるのがスポーツの魅力。その楽しさをこれからも伝えていこうと思います。

ブ、スパイクなどが寄贈された。また被災地の総合型地域スポーツクラブには、志を同じくする全国のクラブから義援金や支援物資が届けられた。

シンボリックな意味で、アスリートの訪問活動が被災地に勇気や元気をもたらすことは間違いない。ただ決して報じられない地道な活動の数々が、『スポーツの力』の源となっている。

■TEAM NIPPON
http://www.teamnippon.jp/
■ふくしま陸上スポーツ少年団
http://www.kikiwaketai2.com/frss/